

(2月号)

保育雑誌より

保育の手帖

時節柄、冒頭より注意をひく

のが「小学校との関連の問題」である。著者は小学校長武田一郎氏。制度上からみた関連。教

育内容からみた関連。関連を密接にする具体的方案の三項からなっている。教育内容が、広い幅をもった弾力性あるもので、一貫性あるものであること。具体的に関連を密接にする方案として六つ挙げられているが、アメリカでは、教師が学年に固定されているシステムのところが多いことや、幼稚園から持ち上りで小学校二年までもつたら戻るといふ案、これは他の条件が複雑になつてくるであろうが、一案として考えるべき問題を含んでいる。行政面、教育面とあらゆる面からふれられているので、一読

したいところである。

それと関連して「文字の学習の問題」国立精神衛生研究所員の玉井収介氏。結論がはっきりしている。わたしは幼稚園であまり字を教えることは反対です、とある。親子に読んでもらいたい。

絵画製作では「幼児の工作の見方」は、林健造氏。実際の子どもからでたことであり、写真入りであるので、わかりやすく、おもしろく書かれている。幼児の工作は、目的性、技術性は発達段階からみて問題にすべきでなく、創造性を評価の尺度の主軸にすべきだと結んでおられる。他の保育内容にも共通の問題を含んでいる。

特別記事として、「幼稚園設置基準」についてくわしくかかれています。現場の先生方もとくに関係あることが多いので、見逃さずに眼を通されることをおすすめする。

保育の友

二月号には特集として「保母学校」の記事が載せられている。これは近く学校を卒業して新しい社会にとびこんでいこうとするもの、そしてまたこれらの若人を迎えようとする側のものの両方の立場の読者に対して、恰好の題材と思われた。

主な記事を紹介してみると、まず巢立つ学生側から「保母学校にはいって」（木村真子）「えらくならなくても真面目な保母さんになりたい」（小松華寿美）の二つの意見がはじめにある。つぎに、学校生活の山である実習生活を取りあげて、現場の姿は学生にどううつつたかを、「私の実習日誌」（和田和子）が語っている。秋田美子氏の「実習のあり方について」はそうした実習の効果をあげるための問題点をよく解明したものである。保育者としての先輩と後輩の学生との間に交された往復書簡「現実から学ぶことを身につけて下さい」（丸山とし）「何よりほしい、先輩との話し合い」（矢作和子）には保母学校生活のあり

かたがよく語られており、ことに先輩として
保母の立場から学校生活を反省して「遠
まわりをしないよう」「現場にはいったが
……」「身についてほしいこと」と提案し
ていることは適切であり、よく問題点を身
につけた姿がうかがえる。

副島ハマ氏の「卒業後の就職状況をみ
る」や、大須賀哲夫氏の「保育所最低基準
に関する研究」などはいずれも資料として
これから菓立つ生徒や関係者によく参考と
なる内容である。

カラーセクションの各頁はどれも保育者
に身近かな話題メモとして楽しく読める頁
である。そしてさらに、「二月の保育計画
解説」この欄は毎月すぐれた記事でうまっ
ているが、今月号もまたこの道を歩むもの
にとって貴重な内容が盛り込まれていると感
じられる欄であった。

幼児の指導

今月は「幼児の指導の方法」の特集で、
指導にあたって大切なことと、指導の目標
を、三宅和夫氏が、お話を通じての指導を
松村光子氏、絵を通じての指導を友田静恵
氏が、それぞれ取り上げておられる。

指導にあたって、子どもたち一人ひとり
の個性を集団生活の中でつかむようにしよ
う、子どもたちの興味や力を正しく理解す
るようにしよう、指導は子どもの要求に応
じた無理のない弾力のあるものを生み出す
ようにしよう、という点など、本当に大切
なことだと共感した。

お話による指導では、子どもと先生の関
係のあり方を固定化しないで、先生から子
どもへの流れと、子どもと同じ線にならび
お互いに流れ合うことと、子どもから先生
への流れと、この三つの立場を先生が転換
させていくことが必要であるし、先生は常
に心のゆとりを持つことが大切だとのべら
れている。

絵を通じての指導では、落ち着きのない

子、無口な子、乱暴な子について、具体的
に指導の仕方を示され、一人ひとりの個性
を生かすように、せっかちでなく、観察記
録をとって計画的な指導をつづけておこな
い、グループのくみあわせに注意するよう
に、強調しておられる。

松村康平氏の助言の仕方は、おかあさん
への有効な助言となるよう、応答の仕方に
気をつけなくては、と考えさせられた。

幼児と保育

「幼児と保育」の二月号は、「幼年期の教
育を確立する」を特集している。

巻頭の牛島義友氏の所論は、研究会や資
料調査などに追われて日もお足らず、幼
稚園や保育所として一番大切な、毎日の子
どもとの生活も、どうかすると見落しはし
ないかと懸念される現在の情勢に、正しい
幼児教育の進路や在り方を警告されたもの
として一読の必要がある。これによって、

周囲の情勢に引きずられてともすると迷路にそれ、進路を失いがちな現場の私たちは、正常な幼児教育の目標や在り方を自分の心の中に把持する拠りどころを持つことができない。

また、四国の観音寺市の、幼小の先生方の話し合いによる共同研究も、この点において、牛島先生の所論を裏づける現場の声として、大きな示唆を与えてくれるものなのである。

その他、イギリスの幼児教育、幼児の生活十態、保育の歴史をべんきょうする、親の態度と子どもの問題……など、いずれも考えさせられたり、教えられたりするところが多い。もちろん毎月のカリキュラムも。

何よりも本誌のいい点は、教育指導誌といった堅苦しさがなく、随筆をよむような気やすさで読める点にある。それでいて、幼児教育の魂や方法が、ときどき、びりりとくる。

保 育 ノ ー ト

「幼児の園内生活を考える場合に、まず幼児の身体寸法について詳細に調査しておく必要がある。……」と一頁に書かれている。そういうことを知れば、幼児が活動するのに無理のない環境をととのえることができる。いままで、幼児を対象として計画しても、寸法的には観念的なことが多いので、標準寸法を調べることも必要である。

こういうと、「施設・設備についてはすでにそなわったもので、どうすることもできない」という声がおこりやすいものである。それはそうなのだが、そういってもうにもならないことを考え、今自分のいるまわりをよくみつめ新しい工夫をすれば小さいことでも必ず何か一つぐらいは得ることがある。その反対に、どんなに新しい、すばらしく考えられたものを与えられても、意欲のない無気力な先生では活動する

幼児の力を発揮することはできない。

三頁から六頁にかけて「生活環境としての幼稚園施設の諸型式図」「幼児の生活環境としての保育室」「幼稚園の改装による工夫計画図」というのがのっている。そのうち四頁の「矩形保育室つくえ並列配置」というのがある。これを見てみると、小学生が先生に問われたことに対して、ハイハイと手をあげているような様子が思い出されてくる。いまだき、一人ひとりの机が教卓の方をむいているという形をとっているところは、まああまりないと思われるので、こういう図を見ることはちょっと奇異な感じがした。平井信義氏の「ドイツのキンダーガルテンを訪ねて」は、われわれにとって未知の国のことを知るのに気軽に読め、しかもその中で得ることがあった。

保 育

目次からじょうずな叱り方①と、幼児画
問答②生活から描画を分離さすな、の二つ
を紹介する。

叱り方は実に難しい問題で現場の教師も
家庭の母親も悩みの問題の一つである。

叱りすぎてはいけない、また叱らずには
過せない、ではどういふふうに持っていけ
ばよいか。子どもの心を傷つけぬように、
そしていて幼児が自発的に方向を転換した
りまたはその方向へむいたりするような助
言が必要である。

早川元二氏もこの点を書いておられ、叱
ったときの幼児への影響を科学的に分析し
て、私どもはなるほどと肯定した。

もう一つ宮武辰夫氏の幼児画問答は毎号
連載されているが、この号では、幼児の画
も環境を整えてあげ、生活経験させること
により、幼児の画は幼児の生活と同じく活
動してくるものだということが、実例を挙
げてかかれている。

母親が熱心のあまり、干渉しすぎたとき

の絵、実際に経験して後の絵、何も指導さ
れず幼児の思うままの絵、それぞれ写真に
よると明らかに差が見られておもしろく読
まれる。画の指導もなかなかむずかしいも
の、これも一つのよき参考になる。

月刊保育カリキュラム

この月の単元は「冬をたのしく」、ねらい
は、寒さに打ちかたつ戸外あそびの指導と、
経験したことをすすんで発表させる、の二
つが（一月と同様）あがっている。そこで
今月は「言語」の項を紹介する。
◇冬から早春への経験を話し合う。

ここでは話し合いとしてみんなが室の
一隅に集ってこそ話し合いができるとい
うのでなく、庭での鬼ごっこするとき、ふと
見上げた木の枝の若芽も、遊び疲れて腰
を降した庭の一隅の小さな草の芽にも、
教師の細かい心くばりや敏感に機をとら
えることによって、よい話し合いができ

ること。また、子どもの生活の本
流である遊びを通して、活発な話し合い
がさせられることを教えている。

◇経験したことをお話、紙芝居、劇あそび
などに再現して発表する。

子どもの生活に近いものからはいつて
いき、既製のものでなく、子どもたちの
力で創作し、次第に工夫させながら、一
つのまとまったものを作っていくとい
う、いき方を述べている。（音楽も製作
も関連づけて）

発表では、発表力の弱い子どもには、
繰り返しの多いところを受け持たせて自
信をつけさせるとか、一部の子どもだけ
が活躍するのでは発展の意味がないの
で、みんなで交代したり、協力すること
こそ意義深いと強調している。

二月は一年間の言語のまとめという
時期になっているので、発表会などを計
画して、精いっぱいやらせたいと筆者は
いつている。